



特別レポート

新作合唱曲による公開講座 スプリングセミナー2018

作曲者、演奏者、司会者とともに学ぶ

合唱界で人気の作曲家が演奏会やコンクール向けの新作合唱曲を発表する教育芸術社主催の合唱セミナー・イベント「スプリングセミナー」が去る3月27日、武蔵野音楽大学のブラームスホールで開催されました。当セミナーは今春で6回目を迎え、新たに6作品が生まれました。当日のステージの様子をご紹介します。

Spring Seminar

同声合唱



長岡利香子(指揮)、鈴木綾子(ピアノ)、八千代少女少女合唱団

佐井孝彰／
『生まれたよ ぼく』

なかにしあかね／
『同声三部合唱とピアノのための バベルの塔』

作曲者、演奏者、司会者3者による 対話で進めるセミナー

教育芸術社主催の合唱セミナー・イベント「スプリングセミナー」は2013年にスタートしました。合唱界で人気の作曲家に演奏会やコンクール向けの新作合唱曲を書き下ろしていただき、各作品について作曲者、演奏者、司会者とともに学ぶセミナーで、毎年、同声合唱、女声合唱、混声合唱を2曲ずつ(全6曲)発表しています。

このセミナーで初演された、同声合唱『ここに つばみが』(作詞: 杉本深由起/作曲: 佐井孝彰)、女声合唱『アンソロジーI -女声合唱とピアノのための- ～序・泣いているきみ～』(作詞: 寺山修司・谷川俊太郎/作曲: 三宅悠太)、混声合唱『若葉の想い』(作詞・作曲: 佐藤賢太郎)をはじめ、多くの委嘱作品が、現在コンクールなどで歌われています。6年間で、新たに生まれた作品は36曲となりました。

当セミナーは、同声・女声・混声の3部に分かれており、各部2曲ずつ、1曲につき30分の持ち時間の中で、まず初演をした後「作曲家による演奏上の3つのポイント」をベースに、実演を交えながら作曲者と演奏者、司会者によってステージが進行していきます。

今年のスプリングセミナーは、春の暖かな日ざしのもと、2017年に新設された武蔵野音楽大学のブラームスホールで行われました。司会は第1回から出演されている、合唱指揮者の藤原規生氏です。

言葉のリズムが楽しい『生まれたよ ぼく』

スプリングセミナーの冒頭は佐井孝彰作曲の『生まれたよ ぼく』。詩人、谷川俊太郎ならではの言葉のリズムが尊重され、鮮や

かな和音の移ろいの中で、3声の旋律がそれぞれ美しく響きます。

佐井氏によるポイントは「4つの場面のキャラクター」「テヌートの表現」「リズムカルに感じさせるために」です。「テヌートの表現」については、具体的な小節を示しての解説です。「この曲では同じテヌートでも3つの種類があります。1つ目は通常のテヌート、2つ目はリテヌートのようなテンポまで遅くなるテヌート。そして3つ目はリタルダンドの要素をもつテヌートです」と、それぞれのテヌートに込めた思いを伝えました。

緊迫感と勢いのある 『同声三部合唱とピアノのための バベルの塔』

同声合唱2曲目の、なかにしあかね作詞・作曲による『同声三部合唱とピアノのための バベルの塔』は、5拍子で書かれた歌のリズムが特徴で、迫力あるピアノも印象的です。

なかにし氏は3つのポイント「どんなバベルを描く? (作品の全体像をつかみ自分達の表現の方向性を明確にする)」「それを効果的に表現するには? (各セクションの歌い方、声と発語と音色とアンサンブル)」「聴いて下さる方に何を受け止めてもらいどんな印象や問い残す? (演奏の構成)」を順に説明し、演奏にあたって

同声 合唱

『生まれたよ ぼく』(作詞: 谷川俊太郎/作曲: 佐井孝彰)
『同声三部合唱とピアノのための バベルの塔』
(作詞・作曲: なかにしあかね)

指揮: 長岡利香子
ピアノ: 鈴木綾子
合唱: 八千代少女少女合唱団



加藤昌則／『Time』



横山潤子／『ありったけの夏』



相澤直人(指揮)、松元博志(ピアノ)、女声合唱団 ゆめの缶詰

「自分で考えたことを表現するために何をしなくてはならないかを知ること」が必要だと話します。

また、八千代少年少女合唱団による初演に対して「バベルの塔を哀悼して歌われている印象を受けました。すばらしかったです」と感動を伝え、新たな2つの歌い方「昔話を会場に語りかけるように」と「バベルの塔を造るために働かされている人たちの気持ちを感じて」を提案し、そのイメージを合唱団が実践しました。「3つとも違うけれど全てすばらしい。私はいつも演奏者のオリジナリティを信じて作曲をしています」というなかにし氏の感想に、背中を押してもらったように感じたかたも多いのではないのでしょうか。

サラ・オレイン氏本人登場『Time』

加藤昌則作曲の『Time』は、テンポが速く、走り抜けるような勢いを感じさせる作品です。

加藤氏が挙げたポイントは「推進力ある音楽の作り方とは!?!」「弱いフォルテ、強いピアノ!?!」「意識的表現、無意識的操作」。楽譜の書き方へのこだわりや、曲の中で唯一テンポが遅くなる箇所についての思いを話し、さらに曲中の **p** を例に出して「作曲家が強弱を付けるときには、音量だけを示すのではなく、そこに別の意味も込めているんです」と、作曲時に意識していることを細かく伝えた加藤氏。これらは、演奏者が楽譜を読むときにたいへん役立ちそうなことばかりです。

また、『Time』の作詞者はNHK Eテレ「おとなの基礎英語」への出演をはじめヴォーカリスト、ヴァイオリニスト、作詞作曲家、コピーライター、翻訳家など多彩に活躍中のサラ・オレイン氏。加藤氏が中学生や高校生のために詞を書いてほしいと、交流のあったサラ・オレイン氏に依頼したというエピソードが披露され、会場に

駆け付けたサラ・オレイン氏は「今日初めて『Time』を音楽で聴いて感激しました」と喜び、『Time』の詞を書いていたときの自分自身について、ステージで振り返りました。

無伴奏の美しい響き『ありったけの夏』

横山潤子氏が書き上げたのは、タイトルどおり夏のきらめくような明るさを想像させる音で描かれた無伴奏女声合唱曲『ありったけの夏』。夏の季節、猛暑の中ががんばって練習する合唱部の生徒たちを応援したいと思いながら書いたというこの作品は、覚和歌子氏の希望に満ちた詩に、流れるような旋律が付けられています。ところどころ「la la la」と歌うパートも、演奏していて楽しいに違いありません。

ポイントは「la la la 隊もゴキゲンに!」「レガートを磨く」「語感でイメージを立ち上げる」です。リズムと和音を担当している「la la la」と歌うパートの重要性を説明し、「この詩は、何か出来事が起こって進むわけではありません。でも選ばれた言葉が全て同じ色味をもち、同じ方向を指しています。言葉に一つ一つイメージをのせて、自然体の空気感を演奏者とお客さんとやりとりしていただきたいと思います」と演奏への希望を伝えました。

女声合唱

『Time』(作詞:サラ・オレイン/作曲:加藤昌則)

『ありったけの夏』(作詞:覚和歌子/作曲:横山潤子)

指揮:相澤直人

ピアノ:松元博志※『Time』のみ出演

合唱:女声合唱団 ゆめの缶詰

混声合唱



福永一博(指揮)、前田勝則(ピアノ)、harmonia ensemble



名田綾子／
『混声合唱とピアノのための
冬の陽ざしの』



山下祐加／
『自分の一歩』

ロマンティックな 『混声合唱とピアノのための 冬の陽ざしの』

名田綾子氏は、スプリングセミナー初登場の若手作曲家です。昨年のスプリングセミナーに聴衆として参加していたという名田氏は「そのときには、今回自身の作品を発表することになるとは思いませんでした」と初登場の喜びを語りました。『混声合唱とピアノのための 冬の陽ざしの』は、テンポが多様に変化する、ロマンティックな印象の曲です。

詩について名田氏は、「吉野弘さんの詩に曲を付けたことはこれまでありませんでしたが、以前から詩集を持っており、いつか書いてみたいと思っていました。吉野さんの詩は研ぎ澄まされた独自の視点があり、また若者を励ますようなぬくもりを感じます」とのこと。ポイントは「『休符を演奏する』ということ」「5種の驚き・気付きの表現」「木を見て森も見ろ」です。「作曲をするときには意図的に休符を入れているので、休符の瞬間が単なる休みではなく、音楽的な空間であってほしい」という作曲家の視点のお話は、演奏者がふだん見慣れている楽譜の中からさまざまなことを発見するきっかけになるとと思います。

詩を丁寧につづる『自分の一歩』

山下祐加氏もスプリングセミナー初登場の若手作曲家です。山下氏は2015年度全日本合唱コンクール課題曲『ねむりのもりのはなし』を作曲し、混声合唱を中心に多くの合唱曲を書いて活躍されています。『自分の一歩』は宮澤章二の詩の一言一言を大切にして優しく語りかけながら、クライマックスへ向けて華やかに展開していきます。

3つのポイントは「流れに乗って語りかけるように」「アンサンブルを楽しんで」「最後はパンチを効かせて力強く」。「アンサンブルを楽しんで」について山下氏は、「この詩は『人と自分を比べないでね』という詩ではありますが、生きていくには周りの人が大切であり、私の場合も演奏していただければ書いた曲はただの紙にすぎません。そのようなメッセージを込めて、ピアノとの掛け合い、1つのメロディーを複数のパートでつくっていく過程など、アンサンブルのいろいろな形を楽しんでいただけたらうれしく思います」と気持ちを伝えました。

混声 合唱

『混声合唱とピアノのための 冬の陽ざしの』

(作詞：吉野 弘／作曲：名田綾子)

『自分の一歩』(作詞：宮澤章二／作曲：山下祐加)

指揮：福永一博

ピアノ：前田勝則

合唱：harmonia ensemble

閉会行事より

混声合唱の部終了後の閉会行事では、サプライズとして『花の名前』の混声合唱版がharmonia ensembleによって初演されました。

『花の名前』は成城学園の卒業生である森山直太郎お かり まち かいと御徒町颯が共作で書き上げた創立100周年記念歌で、鮮やかな花々が目に浮かぶ、優しいメロディーの心地よい作品です。

同曲の合唱版の制作に関わった坂元勇仁氏が作品の生まれた経緯を説明し、混声合唱と女声合唱の編曲を担当したアベタカヒロ氏が「編曲の際はいつも原曲を大切にしたいと考えており、今回もそのように取り組みました」と思いを語って、作品が披露されました。

その後、藤原規生氏の指揮でharmonia ensembleと参加者がともに滝廉太郎の『花』を歌い、スプリングセミナー2018本編は終了となりました。



関係者の皆さんがスプリングセミナー終了後、SNSで紹介してくださいました。ありがとうございます！



左から藤原規生、坂元勇仁



アベタカヒロ

本セミナーで初演された作品は「オリジナル合唱ピース」で発売中です。

同声編99 同声三部合唱とピアノのための バベルの塔

同声編100 生まれたよ ぼく

女声編54 ありったけの夏

女声編55 Time

女声編56 花の名前

混声編98 自分の一歩

混声編99 混声合唱とピアノのための 冬の陽ざしの

混声編100 花の名前

※詳細は本誌裏表紙の「Recommend」をご参照ください。

次回のご案内「スプリングセミナー2019」

日程：2019年3月28日(木)

会場：武蔵野音楽大学 中ホール「ブラームスホール」

Nコン課題曲 ワンポイント レクチャー

スプリングセミナー本編終了後、小学校の部、中学校の部、高等学校の部に分かれて「Nコン課題曲ワンポイントレクチャー」が行われました。

スプリングセミナーでは本編終了後に、毎回「Nコン課題曲ワンポイントレクチャー」と題して、その年のNコンの課題曲を学ぶレクチャーを行っています。

小学校の部はセミナー司会者の藤原規生氏が講師を務めました(ピアノ：前田勝則)。藤原氏は詩について掘り下げて説明し、「スペシャル先生がた合唱団」と称して、ステージ上で合唱団をレッスンする形のレクチャーを行いました。中学校の部は作曲家の三宅悠太氏が、自ら課題曲を歌いながら部分的な練習方法を示したり、曲の中の声楽的に難しい箇所の注意を呼びかけて受講者と一緒に歌ったりしました(ピアノ：松島奈穂)。高等学校の部は相澤直人氏が作品の構成を説明しながら、ポイントになる和音の分析、テンポ、表現方法などを的確に示していきしました。

レクチャーは40分という短い時間でしたが、合唱にたけた講師たちがそれぞれの視点でNコン課題曲と向き合い、絞り込んだ要点をくまなく参加者の皆さんに伝えていたように感じます。

小学校



講師：藤原規生

中学校



講師：三宅悠太

高等学校



講師：相澤直人

授業者に訊く——1



導入で『明日へつなぐもの』を歌う子どもたち。
「音の重なり」を意識しながら声を出す

心を育てる授業、音楽の可能性を信じて

授業者：石原幹雄（横浜市立寺尾小学校） 聞き手：高橋辰也（洗足学園音楽大学）

今回の「授業者に訊く」は、2校とも小学校の授業です。まずご紹介するのは横浜市立寺尾小学校。「音の重なり」に焦点を当てた授業を参観し、教科としての音楽がもつ可能性や学習指導要領との関連、さらに、子どもたちをひき付ける授業づくりについてお話を伺いました。



○たかはし・たつや

洗足学園音楽大学講師。東京都公立中学校音楽科教諭として21年半勤務し、全日本合唱教育研究会事務局長などを歴任。その後、劇団四季に入団し700ステージ以上出演。現在は舞台や演奏活動の他、コンクールの審査員などを務める。

よい規律をつくる

高橋：今日は5年生の授業でしたが、あの子どもたちを指導し始めたのは何年生からですか？

石原：3年生からです。

高橋：授業が始まる時、先生が上行形で「ドレミファソ」と弾くと子どもたちが起立し、下行形で「ソファミレド」と弾いたら座る。授業が終わると『サザエさん』などの親しみのあるメロディーに合わせて1列に並んで教室を出て行く。こういった授業の規律をいつ頃から始めたのですか？

石原：専科で週に1～2回担当する中で、よい規律がないと授業が成立しないし、子どもたちも遊びのような感覚をもってしまふと感じました。そうなるのはほしくないの、初めて受け持つときには規律づくりを徹底しました。音楽の授業でいちばん大切にしているのは「聴く」ということです。授業を始めるときは「始めます」という挨拶の代わりに、子どもたちが音楽室の中に入ってきたらピアノを弾き始め、ある程度の人数が集まったら音で立たせるようにしています。「上行形で立つ」「下行形で座る」というのは、音の高低の感覚を小学生のうちに身に付けてほしいという意図があります。

高橋：まず聴かせて、感覚をつかませるのですね。エレベーターで上がったたり下がったりするときの感覚にも似ていますから、子どもたちも自然に体が動くのでしょうか。

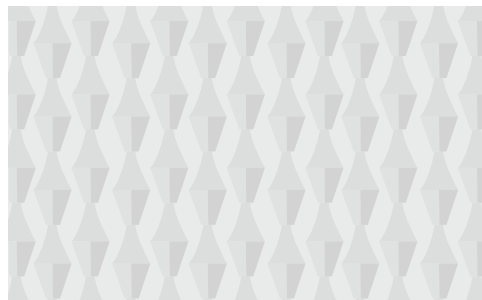
一人一人のよさを大切に

高橋：授業の最初の歌唱では、皆とても楽しそうに歌っていました。歌の指導で最も心がけているポイントは何ですか？

石原：音楽の好きな子どもを増やすことです。それは歌のうまい下手ではないから、まず「音痴」という言葉は絶対に使いたしません。少し苦手なだけで歌わなくなってしまうと、音楽の楽しさが分からなくなります。ほんとうは姿勢や声の出し方についても細かく言いたいのですが、まずは楽しいと感じることが大事ですから。「表現することの楽しさ」を感じ取り、「僕の声はこういうふうに聞こえているんだ」と知ってもらいたいのです。

高橋：先生が歌詞に出てくる「船」のイメージを質問すると、子どもたちからいろいろな意見が出ました。言葉から感じたイメージをどのように表現するかというのは、歌唱の基本だと思います。子どもたちも、固定したイメージではなく、多様な考えがあることを受け入れ、他の子が発言したときに「なるほどな」という姿勢で聞いていたのがすばらしいと思いました。私もふだんから「皆が同じことを考えたら怖いよ」と学生たちに言っています。

石原：美術の場合、お手本と同じように描けなかったら絵が下手というわけではなく、それぞれのよさがある。声も同じです



よね。「あなたにしかない声なんだから、もっともっとその表現を出せばいいよ」と伝えて不安を取り除くことができれば、歌唱の授業の幅はどんどん広がっていくのではないかと思います。

高橋：以前、私が中学校で教えていたとき、入学したばかりの1年生に「音楽が嫌いな子」がいるかどうか必ず尋ねていました。そうすると、特に男子は半分以上が手を挙げます。リコーダーの指づかいが分からないとか、歌が得意じゃないといったことが原因なんですけれど。そのときは、「音楽ってリコーダーを吹くだけじゃないし、上手に歌うことだけが大事なのではないよ」という話をしました。皆が楽しく授業に入っていけるよう、その導入だけはきちんとやっていました。

教科としての音楽がもつ可能性

高橋：教科としての音楽はどのような位置付けだとお考えですか？

石原：去年、子どもたちに「各教科を自分の生活の中でどれだけ重要視しているか」というアンケートを取ったのですが、他の教科が5割ぐらいだった中で、音楽は8割ぐらいでした。その結果を見て、音楽は大きな可能性をもっていると感じました。子どもたちの心を育てる教科だから、自分自身を発揮できる場面をつくっていきたいと思っています。また、中学生になるとテストもあるし、覚えることが増えていきます。だから、小学校のうちにその素地をつくっておこうと考え、歌やリコーダーの楽譜には階名を全部書かせたり、音楽を表す用語にも触れたりします。中学校ではそんな時



ソプラノとアルトが向かい合い、互いの音を聴きながら歌う

間はないだろうから、小学校でやったことがリンクできたらと思っています。

高橋：私も「楽譜は読めなくてもいいけど見ようね」という話をしていました。見ていくうちにだんだん感覚が分かってくるので、「最初から読める必要はないよ」と。子どもたちにとっても、音楽のない生活は考えられないはずです。音楽が自分にとってどういう働きをしているのかを、感覚的にもいいので分かるようになればと思いながら教えていました。

石原：「こうしたらもっと楽しくなるよ」と声を掛け、子どもたちに「なるほどな」と思わせる瞬間をたくさんつくってあげることが大切ですね。

高橋：今日の授業では「船」という言葉を取り上げましたが、「歌詞の中のどの言葉をいちばん大切に歌いたい？」と尋ねて、自分の思いを表現させるのもよいと思います。私は舞台俳優でもあるので、言葉についてはかなりこだわっていて、「こういうふうに歌うと、もう少しはっきり聞こえるよ」と指導しています。あとは呼吸の仕方ですね。例えば、落ち着いているときの呼吸や、驚いたときの「はっ」という呼吸など、音楽の流れの中でどんな呼吸の仕方ならば

自然に話しているように聞こえるかを感じ取らせています。昔の教え子たちはもう50歳近くですが、会うといまだに「先生、歌はブレスだよね」と言います(笑)。

音をよく聴く

高橋：ところで、先生は小学校の全科の免許をもっていらっしゃると思いますが、この学校では今まで専科だけですか？



〇いしはら・みきお
横浜市立寺尾小学校 教諭

石原：5・6年生の担任をもったことがあります。それまでは、中学校からスタートして特別支援学級へ行き、その後は私立の小学校で教えていました。そこは1年生



響きの美しさやハーモニーのバランスについて、聴き役の子どもが感想やアドバイスを発表する

から教科担任制で、音楽に特化した学校でした。マリー・シェーファーの「サウンド・エデュケーション」を土台にして、低学年のうちは外に出て音を聴く活動をするのですが、「アリの歩く音がします」といったユニークな発言が出てくるんです。そうやって1年生のときから土台をつくっていくうちに、どんな歌を歌わせるかという曲選びも大切だと考えるようになりました。小学校全科の免許をもっていることで、むしろ他教科では教えられないものが音楽にはあると感じます。音楽ってメロディーの1フレーズだけでも「ふわー!」となる感覚がありますよね。今日の授業で歌った『船で行こう!』では、「ボン・ボヤージュ!」という歌詞のメロディーラインが「すごい、しびれる!」と子どもたちも言っていました。言葉では説明できないけれど、心が震える瞬間が音楽にはあふれているのではないかと思います。

高橋:今日は「相手の音を聴く」ということで、ソプラノとアルトの間に聴き役の子どもが立ち、どのように響いているのかを聴いていました。聴き役を交替させることで、人によって聞こえ方が違うことを知るのも大事ですね。聴いて何かを感じて、じゃあ自分はどうかと考える流れがありました。

石原:「対話的な学び」といわれていますが、あのようなコミュニケーションを取りながら授業の幅を広げていきたいと考えています。実際、「3度の響きの重なり」といわれても、子どもたちにはピンとこないこともありますよね。でも、重なりの響きの心地よさをしっかり経験して「あ、これが気持ちのいい重なりなんだ」という感覚をどんどん自分の中に蓄積させることはできます。中学生になったときにその感覚を思い出せるよう、なるべくたくさん聴かせるようにしています。

高橋:聴いているときにどう感じたかが大事ですね。教師が一方的にイメージを伝えるのではなく、全て子どもから引き出しながら「聴く」という活動を繰り返す。その中には考えたり感じたりする場面がたくさん含まれています。教師の役割は何を教えるかではなく、子どものもっているよいところをどう引き出すか、何に気付かせるかだと思います。

学習指導要領との関連

高橋:少し堅い話になりますが、学習指導要領との関連、例えば共通教材や指導事項との兼ね合いはどのようにお考えですか？

石原:正直なところ、指導案を書くのは得意ではないのですが、「この題材ではこれをつかませたい」ということは自分の中でリンクしています。初めて「音の重なり」を経験する教材として、4年生の『もみじ』は外せません。教科書の曲も全部見て、その曲がほんとうにこの学年に合致するのを見極めながら進めています。

高橋:学習指導要領のどの指導事項に合致しているのかを確認して、細かく分析していけば、いろいろな関連が見えてきますよね。

石原:研究授業では教材を1つ選び、例えば歌唱1曲しか扱わないことも多いですよ。でも実際は年間指導計画があって、行事との兼ね合いも考えながら教材を設定する必要が出てきます。そうなると45分間を1曲に集中させるのは難しいので、授業の中でさまざまな要素を含めることになります。歌唱もやるけれどリコーダーも音楽づくりも……と、少しずつですがそれを1年間かけてループしながら、目標点に到達す



「リコーダー名人」の掲示物

るように組むことにしています。

高橋: 音楽室の掲示物に「リコーダー名人」というのがありましたね。その中の「(フレーズの)音の切り方」という項目は、歌唱にもつながります。いろいろな場面で意識させていくのがよいと感じました。

石原: 教師になって初めて出会った先生に、「教科書をきちんと教えられない人が、特別な教材をもってきて教えるなんてことはできないよ」と言われました。以前勤めていた小中高一貫校で12年間の計画を作ることになったときも、やはり基本形をきちんと知ったうえで、独自のカリキュラムを構築するようにしていました。例えば4年生の1年間では、この時期に『もみじ』は外せないからその前後で「音の重なり」の要素を少しずつ入れよう、その後に大きな合唱曲を入れたいからそれまでにリコーダーの「音の重なり」も学んで……といったぐあいに。

高橋: いろいろな経験の積み重ねがあって、そういう形になるのだと思います。ところで、音楽を授業以外の場で発表する機会もあると思いますが、そういったことは年に何回ぐらいありますか？

石原: 今日授業をした5年生ですと、年に3回(全校朝会、学校説明会、卒業生を送る会)あります。全校で行う音楽朝会では、各学年が今学習している曲を「こんなふう」に歌っているんだよ」と言葉で説明してから発表します。

高橋: 音楽は最も人目に触れる教科なので、評価されるという難しさがありますよね。それはもう音楽の教師の宿命ですが。

石原: それについては若いときにたいへん悩みました。声が出ていなければ「声が小さい」と言われるし、逆にだすぎても「どなっている」と言われます。悩んだ末、子どもの表情で判断していこうと決めて、自分の中で切り替えるようにしています。いくらきれいな声でも子どもたちの目が生き生きとしていなければ、意図的に歌わせようとしているだけです。

高橋: 一生懸命なのは自分の思いを出しているわけで、大事なことです。さきほどの話に出てきた「聴く」という活動にも通じますが、お芝居をするときは「聴いて

感じるから次の言葉が出てくる。歌も同じだよ」という話をします。「楽譜に書いてあるから歌っています」というのではいけない。それは音符の下ひらがなを歌っているだけです。

感性を育てる

高橋: 今日の5年生の歌声を聴いて、かなり歌い慣れているように感じましたが、やはり低学年からたくさん歌ってきたのでしょうか？

石原: 授業を受け持つのは3年生からなので、そこからがスタートです。

高橋: 最初の話にもあったように、授業の規律から始まり、徐々に育てていくのです。

石原: 3・4年生の授業は「ジェットコースター」だと思っています。子どもは暇だと時計を見るじゃないですか。だから、手を替え品を替えて、終了のチャイムが鳴ったときに「えっ!もう終わり?」となれば自分の勝ちだと思っています。

高橋: 授業が楽しかったら、歌を歌いながら音楽室を出て行ったり、休み時間に口ずさんだりしますよね。それぞれのクラスの特徴を踏まえて指導する必要がありますが、そういうところで何か苦労されたことはありますか？

石原: 音楽専科になってから、歌でクラスの状況が全部分かるようになりました。歌わないクラスは人間関係のトラブルが起きているなど、クラスの現状とリンクするんです。それを踏まえたうえで、「音楽は音楽」と別個に考えるのではなく、クラスの現状を考えながら歌の中で互いに認め合うことができるように工夫しています。そう



先生と一緒にリコーダーの指づかいを確認する



すると心が穏やかになってくるし、表情も明るくなってきます。

高橋: やっぱり歌が上手なクラスは学級経営もきちんとしていることが多いようです。

石原: 音楽を大事にしてくれる学級担任の先生もたくさんいらっしゃいます。音楽の授業で歌っている曲を朝の会で必ず歌わせている先生がいらして、やはりそのクラスは明るくてよいクラスです。

高橋: 歌唱や器楽のオリジナリティーある教材選びは、鑑賞や音楽づくりにも反映させているのですか？

石原: 音楽づくりはたくさん行います。今の時期にやっておかないと感性が育たないので。前の学校では1年生のときに「音の道」という活動をしました。お菓子の袋

や箱など、異なる種類の素材をかき集めて、それらを並べて「音の道」を作り、子どもたちが歩きながら1つずつ触れて音を楽しんでいくんです。「プチプチと音がするよ」というふうに、触ってどんな音がするのかを擬音語で表現させます。また、休符の意味を知るうえで、音のない世界を体感させるのも大切だと思います。

高橋: さきほどの「アリの歩く音」の話もそうですね。実際に音は出ていないけれど、歩いている音がするように感じる。そういう感性が育っていくと、柔軟な発想で物事を受け取ることができるようになるのだと思います。

石原: これからも、ぜひそういった感性を育てていきたいです。



左から高橋辰也先生、石原幹雄先生

本時の授業の位置付け

本時は「音の重なりを意識して歌おう・演奏しよう」の第3時です。5年生は毎年、在校生代表として卒業式に参加し、合唱と合奏を行います。その関連で、本時では歌唱とリコーダー奏を練習します。ソプラノ・アルトの音の確認から始めて、実際に重ね合わせる中で互いの音を聴き合い、心地よさや響きの美しさを感じ取ることを目標に、さまざまなグループで体感しながら歌ったり演奏したりする活動を行います。



佐藤正子 先生
横浜市立寺尾小学校 校長

授業の流れ

	学習の内容、学習活動	指導上の留意点
導入	○ 前時の確認・発声 『明日へつなぐもの』	自分のパートの音だけでなく、「音の重なり」を意識しながら歌うよう声掛けする。
展開	○ 『船で行こう!』各パートの音の確認 ○ 聴き合いタイム ○ 『卒業写真』リコーダーの連指確認 ○ 練習タイム	- 音程を把握できるよう、耳に手を当てて音を確かめるなどの工夫をする。 - 聴き役を立て、「音の重なり」を意識しながら歌えているかどうか、アドヴァイスをし合う。 - 連指やタンギングの確認をする。
まとめ	○ 次時の確認	

授業者に訊く——2



授業冒頭で挿絵を見ながら
『待ちぼうけ』のもととなった話を聞く

子どもたちが主体的に詩と音楽を味わうために

授業者：富崎聖子（熊本市立碩台小学校） 聞き手：ヴァン編集部

2校目は、熊本市立碩台小学校を訪れ、5年生の『待ちぼうけ』の鑑賞の授業を参観しました。実際に鑑賞する前に子どもたちが詩を読んで言葉のリズムや抑揚を想像し、どんな旋律の歌なのかを探ることから始まります。電子黒板を有効に活用し、視覚的に理解するだけでなく音楽を体感しながら理解を深めていく様子が印象的でした。また、鑑賞を表現活動や創作活動につなげていく工夫についてもお話を伺いました。

ICTの活用で可視化

ヴァン(以下V)：今日の授業では電子黒板を大いに活用されていました。『待ちぼうけ』の詩を大きく映し、1番から5番まである歌を自由自在に頭出しして鑑賞するなど、とても活発な内容でした。ICTを活用される前と今では、指導は大きく変わりましたか？

富崎：可視化できる内容が増えたことで、指導の変化はあると思います。今、子どもたちを取り巻く環境は個人差が大きく、どんな音楽を聴いて育ってきたかによって、音楽を聴き分ける力に差が付いてしまっていると感じています。

V：個人差が大きいのですか。

富崎：そうですね。それで、電子黒板上で展開すると細かな箇所に対応できる。子どもの小さな気付きやつぶやきに添えてすぐに提示できるのがすごくいいところです。

V：授業にスピード感があって、子どもたちの学習のテンポも上がりますね。

富崎：はい、子どもの要求にもすぐ応えられます。確かめたいところや、もう1回聴きたいところをポンと頭出しができるので、

早く対応ができるようになりました。

V：ICTを有効に活用し、可視化できるようにすることで、多くの子どもたちが一定の学びまで到達できるようになっているのですね。

富崎：そして個々の気付きや学びを共有できるようになったことがいちばんありがたいことだと思います。

「言葉の抑揚」を意識

V：今日の授業の目当ては「歌詞と旋律の結び付きを味わいながら聴こう」でした。どのようなところに重点を置いていましたか？

富崎：言葉のもつリズムと抑揚です。子どもたちはリズムにはあまり抵抗がないのですが、抑揚については意外と日常の中で意識せずにいるので、そこを扱いたかったんです。それから山田耕筈に対する私の熱い思いです(笑)。山田耕筈の曲づくりに感銘を受け、詩の抑揚を生かして自然に歌えるような曲づくりをしていることを子どもたちに伝えたいというのがいちばんです。でも伝わったかという、今日はちょっと失敗だったかもしれません。

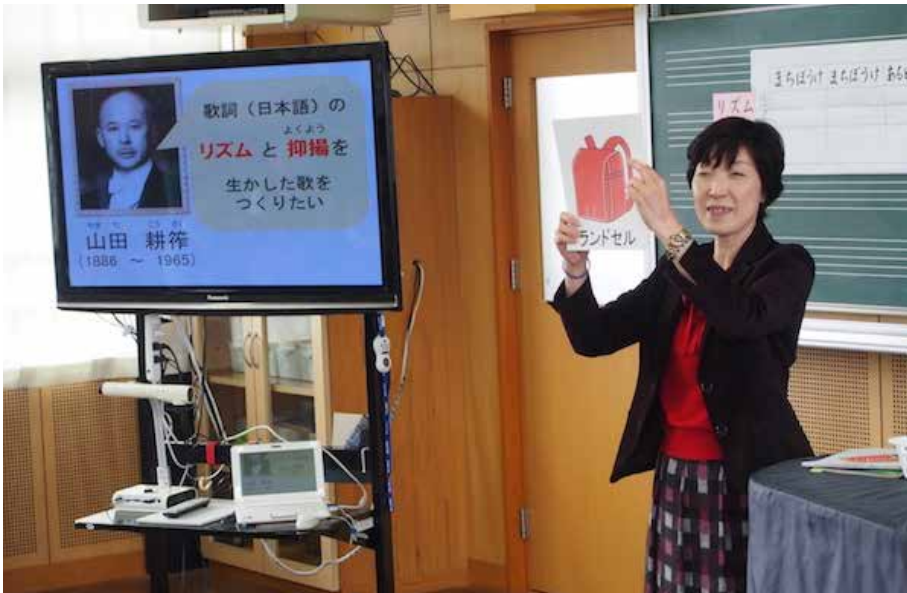
V：子どもたちなりに感じるものが多くあったと思います。はじめは『待ちぼうけ』を聴かせずに、詩のイントネーションとリズムがどう当てはまるのかを子どもたちと確認しました。

富崎：リズムのところで、8分休符があることを誰も気付かず「しまったなー」と思っていたのですが、最後に「8分休符がいるはずですよ」という発言がありホッとしました。

V：“ころり転げた”の“ころり”については、先生と子どもたちで何回もやりとりをしていました。

富崎：授業の流れが少し止まってしまいましたね。いろいろな思いをもっている子どももいたようですが、うまく表現できず、こちらも引き出せなかったのが少し心残りです。ただ曲自体はすごく気に入ってくれたので、この次の授業で「実はこうだったかも」と言ってくるかもしれません。

V：1つの単語として、その言葉自体のニュアンスに音楽が付いているという部分と、全体のドラマとして「物語と音楽」になっている部分が両方重なっているところが難しいと思います。言葉のもつリズムと



山田耕筈の曲づくりの思いを子どもたちに知らせる

抑揚以外に、速度の変化にも子どもたちは敏感ですね。

富崎：ある子どもは、最後のほうがゆっくりとなるのは「今日も待ったけど、ダメだった～」という思いだからだと。だからガックリしてしまってゆっくりになっているんじゃないかと、授業の振り返りカード

に書いていました。その子どもはふだんあまり発言しないので「あなた、これ言うべきだったわよ～」と声掛けしましたから、この次の授業では自信をもって発言してくれると思います。

山田耕筈作品での指導

V：山田耕筈がお好きならば『待ちぼうけ』の後には、『赤とんぼ』や『この道』も指導されるのでしょうか？

富崎：はい。教科書にはまず『待ちぼうけ』が載っているのがいいと思います。詩の内容をイメージしやすく、「ああ、こんな形でいろいろとつながっているんだ」とか、「こんなに楽しい曲なんだ」などと感じながら、言葉のもつリズムや抑揚に焦点を当てることができるよい教材です。『赤とんぼ』

や『この道』が先だとハードルがグリーンと上がってしまうですよ。

V：『赤とんぼ』のイントネーションにはいろいろな説があるようです。

富崎：“あかとんぼ～♪” っていう、あのメロディーにのると情景がスーッと浮かんできます。

V：今日の授業では、言葉のもつリズムを感じ取り、それを抑揚と結び付けて子どもが学んでいく過程がよかったと思います。表現に関しては、歌手によって解釈の違いがあると思うのですが、その辺はどう捉えていますか？

富崎：私も何種類かの演奏を聴きましたが、すごいと思う演奏もありました。

V：山田耕筈の書き込みに対して、演奏者がそれをどう表現するかによって違ってくるのでしょうか。今日の授業では、微妙なところに気付く子どもがいてとても興味深かったです。2番だけは2回目が小さいことを指摘していました。

富崎：意外な気付きがあって、新しい発見をすることもとても楽しみです。

V：5年生3学期のこの時期(3月上旬)に、この題材で指導されるのは大変ではありませんか？

富崎：本校では2学期は音楽会に向けた縦割りの音楽活動を実践しており、そのことが関係しています。今日の授業もほんとは2学期に行う内容ですが、行事が落ち着いたこの時期に扱うことにしました。



学校と地域の強いつながり

V: 碩台小学校は、毎年6年生がNHK全国学校音楽コンクールに出場するなど、合唱活動が盛んですね。

富崎: 伝統として6年生を全教員が鍛える、というぐらい意気込みがあります。

V: 地域からの期待も感じますか？

富崎: すごいです。地域の方々から「最近、校歌の歌声がちょっと……」という指摘もあったと聞きます。

V: 地域や世代を超えたつながりがあるのですね。

富崎: そうなんです。地域で音楽活動をしている声楽家の方やピアノの先生が、朝練の手伝いに来てくださったり、ヴォイストレーニングに付き合ってくださいたりして、厳しいけれどもありがたい面をたくさん感じています。

V: すばらしいことです。

富崎: 今、お昼休みの放送で6年生へのインタビューがずっと流れているのですが、「在校生に伝えたいことは何ですか？」という最後の質問に、大抵の子が「美しい歌声をちゃんと引き継いでください」と言っているのが印象的です。それぐらい歌声が伝統として根付いています。

「なでしこふりかえり」

V: 学校自体が音楽教育を基盤にした教育活動を行っているとのことでした。碩台小学校の校歌には『なでしこの歌』というタイトルが付けられており、教室には「なでしこふりかえり」が掲示されています。授業の最後の「振り返り活動」のもとになってい

ましたが(17ページ写真参照)これは音楽だけでなく、他の授業でも活用されているのですか？

富崎: いいえ、今のところは音楽だけですが、他の教科にも広げたいと思っています(笑)。

V: 学校の方針なのかと思いました。音楽室からの発信なのですか！

富崎: 私のアイディアなんです。本校は校歌をはじめ、あらゆることが「なでしこ」なんですよ。「なでしこ」に対するみんなの愛情たるや、すごいものがあるのです。

V: 授業の最後の3分間で、この「なでしこ」に沿って全部書くのかと思っていました。そうではないのですね。

富崎: 1つか2つでいいのです。いちばん大事なのは「なでしこ」の「し」と「こ」です。知りたいということと、こうしたいという次への意欲をもって授業を終えることができれば、最高の授業だなと思っています。

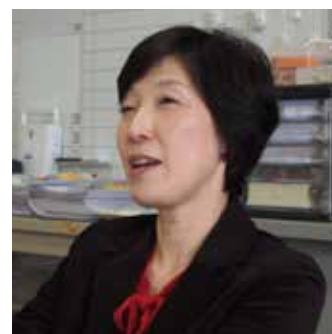
V: 評価と絡めて「な」や「で」を大切にしているのかと思いました。この子はこれをきちんと理解できたといったことが、新しい学習指導要領でも強調されてくるように感じたものですから。

富崎: 分からないと次への意欲は湧きません。分かったからこれもしてみたい、あれも知りたいとなるのではないのでしょうか。そうなるということは、今日の授業に対して、ある一定の理解はできたのではないかと捉えることにしています。



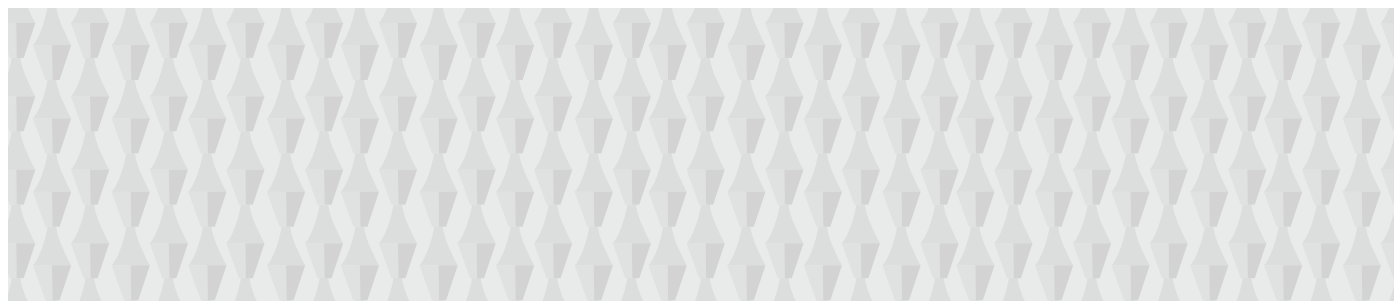
電子黒板に映された音高を可視化した楽譜

いているということは、もう「な」と「で」は既にあったということですね。



〇とみぎき・しょうこ
熊本市立碩台小学校 教諭

富崎: 「これを知りたい!」というのでいいかなと私は思っています。音楽の時間はいっぱい聴かせたいし歌わせたいしやらせたい、というのが基本にあります。でも私としては、その子どもたちの理解度も知りたいし、次の授業につながる内容も知りたいので、できるだけ簡単に、書かせる活動を取り入れています。



鑑賞が全てにつながる

V: 音楽づくりではどのような指導をされていますか？

富崎: 教科書の内容に忠実に指導していますが、子どものレベルに合わせて4年生ならば音階を使った曲作りを行っています。4年生では都節、民謡、琉球の3つの音階を紹介して、好きな音階で短いフレーズをつくる学習をしています。好きなものを選ばせたらちょうどまいぐあい3つに分かれたので、それぞれみんな順番を変えながら1つの作品をつくり上げることを目標に取り組みます。2年生では2学期になると地域から太鼓がいっぱい集まってくるので、リズムを中心に太鼓を活用したお囃子づくりなどに取り組みます。

V: 今日は鑑賞活動でしたが、それが表現活動や創作活動全てに……。

富崎: 全てにつながる感じですね。

V: そういう戦略をもっていらっしゃるのですね。

富崎: はい。まずは夏に音楽づくり。それから歌唱にその学習を生かしていくと、も



学習したことを実感しながら『待ちぼうけ』を歌う

う卒業式の歌の練習が始まる季節になってきます。

V: 学びのまとめ、あるいはこれからの出発点として鑑賞活動を行うのはよい案だと思いました。総合的にいろいろな活動に

広がっていく可能性をもっていますね。

富崎: 広がっていきますし、たくさんの活動をしていると、鑑賞したときに「あれがあれと一緒にだ」と感じることもできるようになります。



志波景子先生

熊本市立碩台小学校 校長

本校は伝統的に音楽教育に力を入れています。週に1回、朝の授業前の時間を利用した「ミュージック・タイム」で、授業に必要な基礎となる部分を学びます。子どもたちがリズム遊びをしたり、季節の歌に合わせて手拍子をしたり、音の高低を手で表したりしながら、最終的には聴音活動へつなげる活動ですが、本校卒業の保護者の方たちに聞くと、以前は毎朝聴音をして記譜していたそうです。

現在は年間の歌声づくりの取り組みや全校児童で創り上げるミュージカルの取り組み、器楽部の伝統の音色も特色です。そして、本校の特色は、学校経営の柱として校歌『なでしこの歌』に歌われている「なでしこ精神」を大事にしている点に最も表れていると思います。講話などを通じて、一年中学校歌について話をしています。校歌に歌われているなでしこの花の姿が、本校が目指す子どもの姿ということなのです。

本時の学習目標

- ・歌詞(日本語)のリズムや抑揚を生かした旋律の工夫に気付く。
- ・歌詞の内容を生かした表現の工夫に気付き、自分の表現に生かそうとする。

授業の流れ

学習の内容、学習活動	子どもの思考を促す教師の支援(○)および評価(◆)
1『待ちぼうけ』の歌詞のもとになった中国の話を聞く 2 本時の目当てを知る (1)『待ちぼうけ』の歌詞を読み歌詞の特徴を出し合う (2)歌詞に合う旋律を予想する (1番の1フレーズのみ) ① 歌詞に合うリズムを考える ② 言葉の抑揚に合う音高を考える 3『待ちぼうけ』を聴く ① 1番を聴く ② 全曲を聴く 4「なでしこ振り返り」をする	○ 挿絵を見せながら、話の面白さ滑稽さを感じ取れるようにする。 ○ 歌詞と旋律の結び付きを味わいながら聴こう ○ 5番までの歌詞を読み合わせ、言葉の繰り返しや5・7調のリズムの楽しさなどの気付きを出し合う。 ○ 山田耕筰について知らせ、山田耕筰の歌曲づくりへの思い「日本語のリズムや抑揚を生かした歌をつくりたい」を知らせる。 ○ 「ランドセル」「チョコレート」などで、1年生のときの「言葉のリズム遊び」を思い出し、手を叩きながら言葉に合うリズムを考えていく。 ○ 「雨」と「飴」、「橋」と「箸」を使って言葉の抑揚について理解し、声に出して読みながら音高を可視化していく。 ○ 自分たちの予想と実際の楽譜を見比べながら歌を聴き、歌詞のリズムと抑揚を生かした旋律の工夫を感じ取れるようにする。 ◆ 一緒に歌い、歌いやすさ、覚えやすさを実感する。 ○ それぞれの歌詞を確かめながら、速度や強弱、歌い方など歌詞の内容が伝わりやすい工夫がされていることを見付けていく。 ○ 4観点のいくつかに絞って今日の学びを振り返るようにする。 ◆ 歌詞を生かす旋律の工夫や作曲家の思いに気付き、これから歌唱に生かそうとしている。



富崎先生のアイデアで始まった「なでしこふりがえり」



振り返りカードには「なでしこ」のうち1つか2つ記入すればよい





特集

移行期における 授業実践

これまでヴァンでは、学習指導要領について、

少しでも分かりやすくお伝えできるよう、座談会や授業実践レポートなど、
さまざまな形でお伝えしてまいりました。

この春より、新学習指導要領の全面実施を前にした移行措置の期間に入り、
これからの授業をどのように変えていけばよいのか、悩んでいらっしゃる先生も多いと思います。

そこで、今号の特集では、「移行期における実践への提言」と題し、

小学校編は上野学園大学の山内雅子先生、中学校編は信州大学の齊藤忠彦先生より、
先生がたへ向けたメッセージをお届けいたします。

新学習指導要領をどのように理解し、いま、何を実践していけばよいか、

明日からの授業で大切にしていいただきたい視点を解説していただきました。

— Information —

『小学校・音楽科 新学習指導要領ガイドブック』『中学校・音楽科 新学習指導要領ガイドブック』が発行されています。電子書籍版も発売され、いつでもどこでも気軽に読むことができます。詳しくは、本誌裏表紙「Recommend」をご覧ください。



○やまうち・まさこ

山内雅子（上野学園大学音楽学部音楽学科 特任教授）

新学習指導要領への移行措置の期間がいよいよ始まりました。小学校では平成30年度から平成31年度までが移行措置の期間となります。この期間どのような指導を実施していくかは各学校の判断によりますが、新学習指導要領の目標や内容を確実に理解し、全面実施に向けて新学習指導要領の趣旨を踏まえた指導計画を立案するための大切な期間となります。

そこで、本稿では、新学習指導要領改訂のポイントと指導計画の立案に向けて大切にしたい視点について紹介します。

1 改訂のポイント

●目標の改善

教科の目標には、音楽科の学習が、どのような資質・能力を、どういった学習活動を通して育成するのかが、明確に示されています。音楽科は「生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力」の育成を目指す教科であるとし、そのためには、これまでと同様に、表現及び鑑賞の活動を通して行うこと、そして、新たに「音楽的な見方・考え方」を働かせることが必要であると示されています。

今回、教科の目標の柱書に、「音楽的な見方・考え方」という文言が新たに入ってきました。「音楽的な見方・考え方」とは、音楽科の特質に応じた物事を捉える視点や考え方であり、「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や文化などと関連付けること」と考えられます。音楽的な見方・考え方を働かせて学習をすることにより、児童の発達の段階に応じた、音楽科の「知識及び技能」の習得、「思考力、判断力、表現力等」の育成、「学びに向かう力、人間性等」の涵養が実現し、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力が育成される、という構造になっています。

学年の目標も、従前「(1)音楽活動に対する興味・関心、意欲を高め、音楽を生活に生かそうとする態度、習慣を育てること」「(2)基礎的な表現の能力を育てること」「(3)基礎的な鑑賞の能力を育てること」の3観点で示されていた学年の目標が、教科の目標に合わせて「(1)知識及び技能」「(2)思考力、判断力、表現力等」「(3)学びに向か

う力、人間性等」の三つの柱で整理されています。

●内容の改善

「2内容」は、「A表現」「B鑑賞」「共通事項」で構成されており、現行と変わりませんが、今回の改訂では、それぞれで示す内容を、ア「思考力、判断力、表現力等」、イ「知識」、ウ「技能」に対応するように再整理され、指導すべき内容が一層明確になるようにしています。その中で、「知識」に関する指導内容は、「曲想と音楽の構造との関わり」などを理解することに関する具体的な内容を、領域や分野ごとに、各学年の発達段階等を踏まえて示されています。

当然のことですが、音楽科における「知識」とは、曲名や作曲者、曲が生まれた背景、音符、休符、記号や用語の名称など、単に事柄を知ることだけではありません。児童一人一人が、学習の過程において音楽に対する感性を働かせて感じ取り理解するものです。そのようなことを踏まえ、「○○と○○との関わり」のように示し、○○と○○との間にはどのような関わりがあるのかを捉え、理解できるようにすることが「知識」の習得であるとしています。

新学習指導要領では、見た目は大きく変わりました。でも、しっかりと読み込んでいくと、新たな内容が付加されたわけではなく、目標や内容が構造的に示され、これまで大切にしてきたことは継承されていると分かります。

2 移行期における指導計画の立案に向けて

移行期中は、新学習指導要領の目標や内容についての理解を深めつつ、全面実施に向けて指導計画を準備して

いくことが大切となります。その際、「指導計画の作成と内容の取扱い」に示されたことをしっかりと読み込みながら、準備を整えていくことが必要です。

●「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善

「主体的・対話的で深い学び」は、今回の改訂における授業改善のキーワードです。音楽科においてもこの視点から授業改善を図るようにすることが重要です。その際、次のことを踏まえることが大切だと考えられます。

①「主体的・対話的で深い学び」は、それ自体が目的ではなく、資質・能力の育成に向けて行うものであり、授業を展開する上で大切な授業改善の視点であること。②1時間の授業の中で全てが実現されるものではなく、内容や時間のまとまりを見通して資質・能力が効果的に育成されるように、学習場面を設定することが大切であること。③特に「深い学び」の視点に関して、音楽科の学びの深まりの鍵となる「音楽的な見方・考え方」を、学びの過程の中で働かせること。④これまでの音楽科の学習における本質的な考え方を継承していること。

●資質・能力の関連を図った題材構成

表現領域では、ア、イ、ウ(鑑賞領域では、ア、イ)の各事項を全て扱い、適切に関連させるとともに、[共通事項]との関連を十分に図った題材を構成することが求められます。ア、イ、ウに対して、(ア)(イ)(ウ)のように複数の事項を示している場合については、指導のねらいなどに応じて1つ以上を扱うようにします。

なお、学習評価については、中教審の答申において、育成を目指す資質・能力に合わせて「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点で評価する方向性が示されています。評価についても今後検討していくことが必要になってくると思いますが、移行期においては、現行の4観点(「音楽への関心・意欲・態度」「音楽表現の創意工夫」「音楽表現の技能」「鑑賞の能力」)で評価することに留意する必要があります。

●「我が国や郷土の音楽」に関する学習の充実

今回の改訂の基本的な考え方として、我が国や郷土の音楽に親しみ、よさを一層味わうことができるよう、和楽器を含む我が国や郷土の音楽の学習の充実を図ることが挙げられています。これまで5・6年生で取り上げる旋律楽器として例示されていた和楽器が、新たに3・4年生でも

例示されるとともに、我が国や郷土の音楽の指導に当たっての配慮事項として、「音源や楽譜等の示し方、伴奏の仕方、曲に合った歌い方や楽器の演奏の仕方などの指導方法を工夫すること」と新たに示され、学習指導要領解説には口唱歌^{くちいしやが}の有用性も例示されています。これまで以上に児童が我が国や郷土の音楽に親しみ、よさを一層味わうことができるよう、指導の改善を図っていくことが大切です。

●生活や社会の中の音や音楽と主体的に関わっていく学習の充実

教科の目標の柱書には、「生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力」の育成を目指すことが記されています。音楽科の学びと学校内外における音楽活動のつながりを児童が意識できるようにするなど、生活や社会の中の音楽と主体的に関わっていけるような生活経験的な視点を取り入れた題材を工夫することも大切だと考えられます。

おわりに

新学習指導要領の目標や内容は、子供たちの学びとして実現できてこそ、真に意味をもちます。新学習指導要領の趣旨を子供の姿として実現するためには、研究者、行政の関係者、教師、さらに地域の演奏家などが協働して、新学習指導要領の趣旨を踏まえた優れた実践を創り出していくことが重要です。一緒にがんばっていきましょう。





○さいとう・ただひこ

齊藤忠彦(信州大学教育学部 教授)

平成29年3月31日に新学習指導要領が告示されました。これまでより分量が増え、細分化されているので一見複雑そうにみえるのですが、本質的なことは現行の学習指導要領と大きくは変わっていません。逆に構造化されることにより、理解しやすくなっている面もあります。まずは、「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説音楽編」(文部科学省)に目を通していただけたらと思います。

さて、移行期間中(中学校では平成30年度から平成32年度まで)については、現行学習指導要領の規定にかかわらず、その全部または一部について新学習指導要領の規定によることができるという特例措置があります。移行期には、まずは新学習指導要領を理解すること、その上で、徐々に授業実践の移行を試みることになるかと思っています。そこで、本稿では、最初に新学習指導要領を理解するポイントを確認し、続いて、授業実践の移行にあたり留意したい点や大切にしたい視点を紹介します。

1 新学習指導要領を理解するポイント

●「音楽的な見方・考え方」について

今回の改訂で、「見方・考え方」という文言が新しく入ってきました。「見方・考え方」とは、各教科等の特質に応じた物事を捉えるための視点や考え方です。「音楽的な見方・考え方」とは、「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連付けること」と記されています。「音楽に対する感性を働かせ」は感性に関わることで、「音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え」は知性に関わることです。つまり、感性と知性を融合させて音や音楽を捉え、「自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連付けること」が「音楽的な見方・考え方」であると示されたのです。

●資質・能力の三つの柱について

今回の改訂では、各教科ともに育成すべき資質・能力が明確にされ、音楽科では、「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力」と示されました。資質・能力の育成にあたっては、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱に沿った学びの構造化が必要であるとし、新学習指導要領の目標や内容は、三つの柱に沿って再整理されて

います。音楽科の目標(1)は「知識及び技能」の習得に関すること、(2)は「思考力、判断力、表現力等」の育成に関すること、(3)は「学びに向かう力、人間性等」の涵養に関することが示されています。

●〔共通事項〕について

今回の改訂で、〔共通事項〕は、育成すべき資質・能力として位置づけられ、アについては「思考力、判断力、表現力等」に関する資質・能力、イについては「知識」に関する資質・能力と示されました。〔共通事項〕は、表現及び鑑賞の学習において共通に必要な資質・能力であり、その位置づけは、これまでと変わりません。なお、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えることは、これまで以上に重視されています。

●繰り返し登場するキーワードの理解

新学習指導要領には、繰り返し登場するキーワードがあります。例えば、以下に示すような「曲想」「知覚」「感受」などです。学習指導要領解説に示されている定義をしっかりと理解しておくことが大切です。

「曲想」：その音楽固有の雰囲気や表情、味わいなどのこと

「知覚」：聴覚を中心とした感覚器官を通して音や音楽を判別し、意識すること

「感受」：音や音楽の特質や雰囲気などを感じ、受け入れること

2 移行期における実践に向けて

● 題材を設定する上での留意点

新学習指導要領に示されている「第2 各学年の目標及び内容」の「2 内容」は、前述の三つの柱に沿って示されています。例えば、「2 内容 A 表現(1)」の歌唱の活動について取り上げると、アは「思考力、判断力、表現力等」、イは「知識」、ウは「技能」に関する資質・能力が示されています。題材の設定にあたっては、ア、イ、ウを単独で扱うのではなく、ア、イ、ウを組み合わせた形で題材を設定するように留意する必要があります。

● 「知識」や「技能」の考え方について

新学習指導要領では、「知識」や「技能」という言葉が目につきますが、「知識」や「技能」を単独で取り出して扱うということではありません。「知識」や「技能」は、「思考力、判断力、表現力等」と関わらせて習得するものであることに留意しなければなりません。「知識」は、単に音楽記号を覚えるというような知識だけではなく、音楽活動を通しての実感を伴った知識の習得を大切にしたいものです。また、「技能」についても、創意工夫を生かした表現をするために技能の習得が必要となるのです。

● 評価について

これまで音楽科では「音楽への関心・意欲・態度」、「音楽表現の創意工夫」、「音楽表現の技能」、「鑑賞の能力」の4観点が示されていましたが、今回の改訂で、資質・能力の三つの柱で整理されたことにより、評価の観点も「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3観点とする方向で検討が進んでいます。しかし、移行期の実践においては現行の4観点で評価をします。したがって、現行の各観点で、何をどのように評価しているのかを再確認していくことが、新しい観点への円滑な移行の準備になります。

● 「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる」について

今回の改訂で、目標の柱書に示されている「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる」については、特に大切に考えたい視点です。生活や社会の中の音や音楽には、例えば、虫の音、お寺の鐘の音、映画やテレビドラマの様々なシーンで流れている音楽、祭囃子の音楽、音

楽ホールで鑑賞する音楽、カラオケで歌う音楽、スマホなどで鑑賞している音楽などがあります。このような音や音楽が、学校で学ぶ音や音楽と乖離してしまうのではなく、学校での音楽の学びが、生活や社会においても意義があると実感できるような関係、または、その逆の関係が生み出せるような題材や教材を検討していくことが大切です。人間は、音や音楽で心を癒やしたり、高揚させたり、喜びや悲しみなどの感情を共有したりすることができません。その原点は、学校内も学校外も皆一緒のはずです。

おわりに

移行期は、音楽科の授業実践を模索する大切な時期です。新学習指導要領の方向性を把握した上で、こんなことができるのではないか、あんなこともできるのではないかなど、こう考えたらよいのではないかなど、先生方の新しい発想で授業を構想し、それを実践したり、研究会等で情報交換したりすることがとても大切です。音楽は人類が生み出した文化であり、文化は時代とともに進化しています。移行期は、音楽科の授業を進化させるエネルギーに満ち溢れるときであってほしいと願っています。



レポート

「これから」の ために―― 声を育てる札幌の冬

第33回 中学校合唱演奏会『合唱の輪』

平成30年2月3日、札幌サンプラザコンサートホールにおいて「第33回中学校合唱演奏会『合唱の輪』」が開催されました。同演奏会は、札幌市を中心にさまざまな中学校が集う合唱活動発表の場として、長い年月をかけて発展を続けてきました。



札幌市立琴似中学校 有志合唱団（指揮：津田 尚 先生）

中学校1・2年生に掲げる「目標」

始まりは昭和61年。合唱部の3年生が引退し、新入生が入ってくる前の冬の時期に、1・2年生が発声や演奏技術の目標を立てて、合唱活動を行うことができるようにと「中学校合唱演奏会『合唱の輪』」が設けられた。開始当初に比べて参加校も増え、演奏レベルも年々上がっているという。各学校の選曲を見ると、



会場の札幌サンプラザコンサートホール

以前は学校祭で歌った曲、卒業式のための歌や新入生歓迎会の歌など、学校行事と関係する歌がほとんどだったが、現在のプログラムには、この演奏会のために選曲された作品がヴァリエー

ション豊かに並ぶ。参加校は札幌市の中学校が多いが、他の地域の中学校も参加することができる。

出演するのは合唱部だけではない。有志合唱として約200人が学年合唱をしたり、生徒数の少ない学校では全校生徒での参加があったり、群読を交えながら演奏する学校もあった。各学校が自由に発表できる合唱活動の場であることが最大の特徴だ。

1・2年生がただ練習するだけではなく、「演奏会」という目標のためにがんばれるよう、教師たちが応援し支えてきたこの「中学校合唱演奏会『合唱の輪』」は、33年という長い月日をかけて、札幌市及び近郊の合唱を愛好する中学生たちの大切な場所として育ってきたのである。

学校ごとに豊かな個性を披露

今年の出場は計29校を予定していたが、そのうち3校が残念ながらインフルエンザの影響で欠場となってしまった。出場校



発声練習の様子

は第1部から第3部まで3つに分かれており、各部ごとに参加生徒全員による発声練習のあと、開会式が行われ、全体合唱『大地讃頌』が歌われた。客席に朗々と響き渡る『大地讃頌』を、保護者たちがうれしそうに聴き入る姿が印象的だった。

その後は持ち時間7分の中で、各参加校が自由に演奏していく。曲目は学校によってさまざまで、『春に』『信じる』など定番の合唱曲、ポップスの『春よ、来い』『時代』、そしてミュージカル曲『Chitty Chitty Bang Bang』、クラシック音楽の『フィンランディア』、その他コンクール向けの作品まで幅広く取り上げられたため、聴いている生徒たちも楽しめただろう。どの学校も最高と思われる演奏をのびのびと披露していた。

第3部の閉会式では、今年度で定年を迎える札幌市立伏見中学校合唱部の棚橋紀子先生へのサプライズの花束贈呈と、棚橋先生の指揮による『大地讃頌』の全体合唱が行われた。教師と生徒の思いやりに満ちた、タイトルどおりの「合唱の輪」の温かさを、札幌の冬に感じることができた。次回の「第34回中学校合唱演奏会『合唱の輪』」は平成30年秋オープンの「札幌文化芸術劇場hitaru」で平成31年1月26日に行われる。

(ヴァン編集部)



棚橋紀子先生指揮による全体合唱『大地讃頌』

Interview

—この『合唱の輪』は生徒たちにとってどのようなものであってほしいですか？

「この演奏会があることによって、この時期、子どもたちはただ練習するだけではなく、目標を明確にすることができます。すると、実際に生徒たちの歌に技術の高まりが見えてくるんですね。また、この演奏会には合唱部の上手な子どもたちが参加する一方、いつもは音楽や学校行事の時間でしか合唱に触れることのない子どもたちも参加します。そのため、ふだん聴けないよい演奏を聴けるチャンスになればいいと思います。子どもたちには『3年生が抜けても自分たちでがんばるぞ』という到達点の演奏会として、その成果を十分に発揮し、1・2年生だけでもできるという自信をもつとともに、互いの演奏を聴き合うことで、学ぶ機会と捉えてほしいですね」

—北海道はたいへん音楽が盛んですよね。夏には「全日本合唱教育研究会 全国大会 札幌大会」も開かれます(平成30年8月17日、札幌市教育文化会館大ホール)。

「全国大会が札幌で行われるのは10年ぶりです。先生がたも積極的に活動してくださっています。できるだけたくさん子どもたちにステージに立ってもらい、作曲家やプロの指揮者の先生から直接アドバイスを受け、それらを味わってほしいですね。北海道の先生がたにとっては、私たちが普段親しんでいる合唱曲の作曲家と話せる貴重なチャンスですし、北海道以外の先生がたにとっては、大会だけでなく、8月の北海道の、とても過ごしやすいわやかな風を体感し、美味しいものをたくさん味わっていただく機会として、ぜひお越しいただきたいです」



藤本尚人 先生
札幌市合唱教育研究会 会長
札幌市立星置中学校 校長

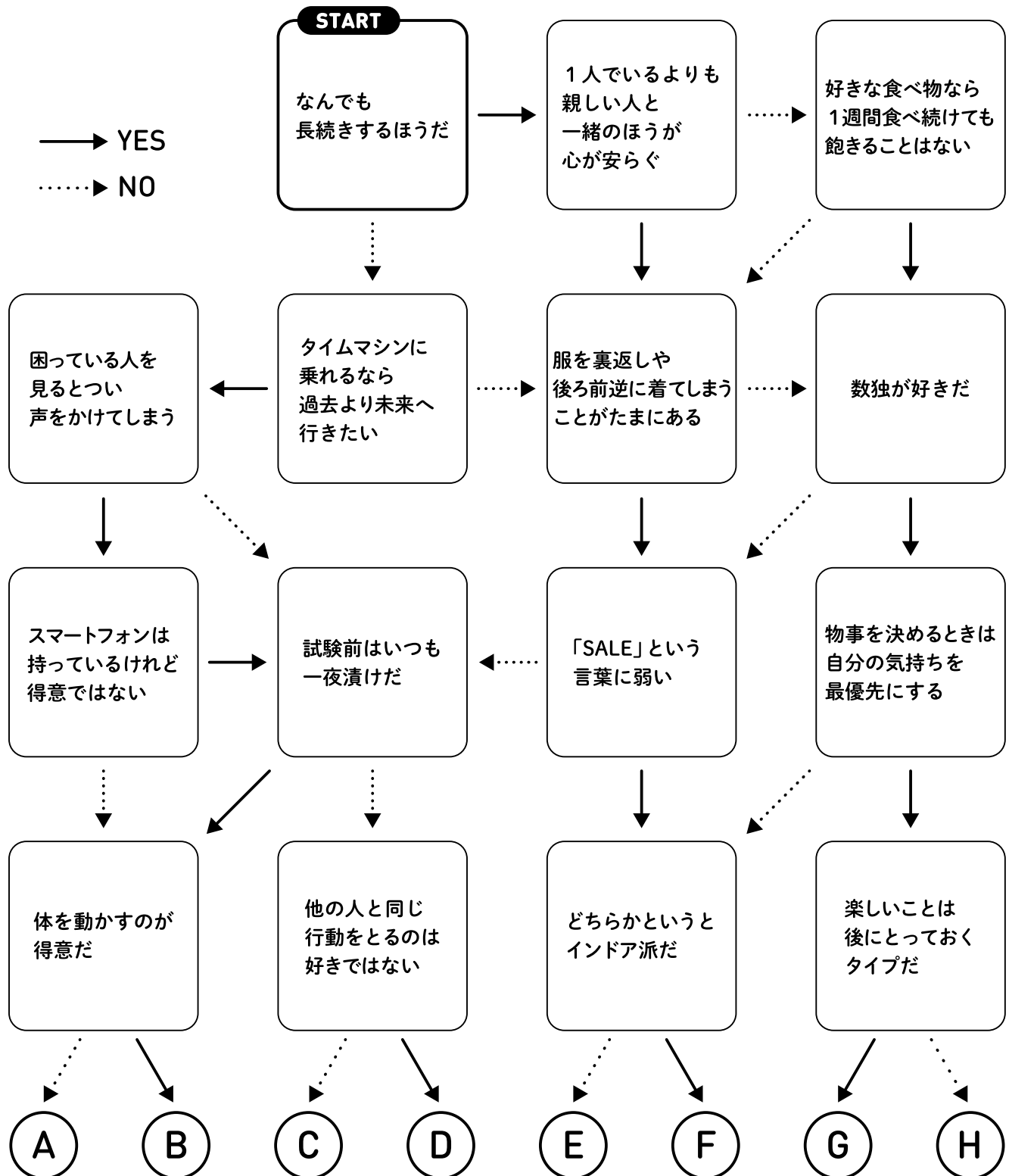
音楽診断

第③回

オーケストラ楽団員編

教育芸術社オリジナルでお届けする音楽診断企画の第3弾。今回は、オーケストラの楽器の中から、あなたの性格にぴったりの楽器を診断します。

監修・解説 = 佐伯茂樹
Text = Shigeki Saeki



A 目立つけれど待つことの多い トロンボーン

金管楽器のトロンボーンはとても大きな音を出すことができるので、オーケストラや吹奏楽の曲のクライマックスで活躍しますが、オーケストラの曲では、そこに至るまでは出番がなくて休んでいることも少なくありません。ベートーヴェンやブラームスの交響曲では、30分近く音を出さずに待っていなければいけません。



B 演奏から運搬まで体力のいる コントラバス

コントラバスは、ヴァイオリンと同じ弦楽器ですが、大きいもので高さが2メートル近くあるので、演奏するときには他の楽器よりも身体を大きく動かさなければいけません。右手で行う弓の操作もそうですが、音の高さを変える左手の指の移動も大変です。さらに、練習が終わったあとは、自分で楽器を持って帰らなければいけません。



C みんなときれいにそろうかが問われる ヴァイオリン

オーケストラでのヴァイオリンは、同じパートを大勢弾いているので、他の人と弾き方を合わせなければいけません。管楽器とは違って、弓の動かし方が他の奏者と違うと聴いている人にバレてしまうので、練習前に弓の動かし方を決めて楽譜に書き込んでいます。そこでリーダーになるのがコンサートマスターです。



D さまざまなキャラクターを演じる クラリネット

クラリネットは、美しい音だけでなく、おどけた音やではな音を出すことができます。また、オーケストラでは、曲によって長さの異なる楽器を持ち替えるので、さまざまな音色を楽しみたいという人に向いているでしょう。とても表情豊かな楽器なので、オーケストラだけでなく、吹奏楽やジャズなど幅広いジャンルで活躍します。



E 外向的で野外で吹くのも好き トランペット

古くから戦争の合図や王様の到着で吹き鳴らされてきたトランペットは、オーケストラの中でもひととき目立つ存在です。クライマックスやファンファーレでは特に目立ちますが、その分、吹き損じをしたときも目立ってしまいます。そういう細かいことは気にせずに、アウトドアで遊ぶのが好きな人が多いかもしれません。



F 休みの日もリード作りに励む オーボエ

木管楽器のオーボエは、とてもデリケートな美しい音を出せますが、楽器の構造が複雑で繊細なので、いつも掃除をして、きちんと調整しておかなければなりません。また、音色を左右するリードも自分で作る人が多く、休みの日や楽器を吹いていない休憩中もリード作りに時間を割いて、外で遊ばないという人がけっこういます。



G ここぞというクライマックスを築く ティンパニ

打楽器のティンパニは、出すことのできる音が限られているので、特定の音しか出番がありません。そのため、休んでいることも多く、じっと待っていなければなりません。でも、曲が盛り上がりるところでは、誰よりも重要な役目として、決める音を担当します。そのため、ティンパニ奏者は「第二の指揮者」とも呼ばれています。



H 美しい音で合奏に花を添える フルート

木管楽器のフルートは、とても澄んだ明るい音が特徴で、小鳥の鳴き声の描写が得意です。低い音域ではあまり大きな音が出せませんが、高い音域では鋭い音を出すことも可能で、よく聞こえます。美しい旋律を担当することも少なくありませんが、合奏で飾りのような音を吹くこともとても効果的です。



佐伯茂樹(音楽評論家)

音楽評論、音楽研究、古典トロンボーン奏者、オフィクレイド奏者。早稲田大学卒業後、東京藝術大学でトロンボーンを学ぶ。ミュージック・ペン・クラブ・ジャパン会員。『音楽の友』『バンドジャーナル』で連載執筆中、『レコード芸術』月評担当(以上音楽之友社)。NHKテレビの『N響アワー』『ららら♪クラシック』に出演。著書に『名曲の真相』(アカデミア・ミュージック)、『名曲の暗号』(音楽之友社)、『おもしろ管楽器事典』(ヤマハミュージックメディア)、『カラー図解 楽器から見るオーケストラの世界』(河出書房新社)などがある。